

人間への信頼とソーシャル・キャピタル — 東京都小平市における研究 —

草野 篤子・瀧口 眞央*

まえがき

ソーシャル・キャピタルとは何か？ソーシャル・キャピタル (Social Capital) とは、「ネットワーク (社会的なつながり)」「規範」「信頼」といった社会的主体がその特徴によって、共通の目的を達成するために協調行動をみちびくものとされる。この「ソーシャル・キャピタル」という新しい概念が、物的資本 (Physical Capital) や人的資本 (Human Capital) などと並ぶ概念として、近年、世界的に注目を集めている。

具体的には例えば、ソーシャル・キャピタルが豊かな地域ほど、失業率や犯罪率は低く、出生率は高く、また平均寿命も長く、新規開業率も高いという調査結果がある。つまりソーシャル・キャピタルは、地域やコミュニティがかかえる様々な問題を解決する糸口となるような可能性があると考えられている。

これまでのソーシャル・キャピタルに関する既存研究によると、結合型ソーシャル・キャピタルは社会の接着剤とも言うべき強い絆や結束によって特徴づけられ、内部志向的であると捉えられており、この性格が強すぎると「閉鎖性」や「排他性」につながる場合もあり得る。これに対して橋渡し型ソーシャル・キャピタルは、結合型にくらべ、絆や結束はより薄い、より「開放的」、「横断的」であり、社会の潤滑油とも言うべき役割を果たすとみられている。多くのソーシャル・キャピタルの議論において、後者の開放的なソーシャル・キャピタルが重要であるという基本的認識が展開されている。

こうしたソーシャル・キャピタルは市民運動の分野を例にとれば、結合型ソーシャル・キャピタルが自治会・町内会等の地縁的な活動を担う組織、橋渡し型ソーシャル・キャピタルはボランティア・市のNPO活動を担う組織が主として捉えられることが多い。

この論文では、「一般的な信頼」と「旅先や見知らぬ土地での信頼」の信頼の度合いによって、保護者の日常生活、学校、子どもの生活、社会への関心、属性に違いがあるかどうかをクロス集計の結果を分析しながら見ていく。信頼度の高い「信頼できるグループ」と、他人に対して、注意することに越したことはないと感じている「注意グループ」に分けて特

*東京家政学院大学

Atsuko KUSANO, Mao TAKIGUCHI : Trust in Human Beings and Social Capital : A Study on Kodaira City in Tokyo

徴を浮き彫りにし、他人への信頼が強い背景を探り、人間への信頼を高めるソーシャル・キャピタルについて考察する。

調査の概要

2007年5月から9月にかけて調査用紙を作成し、10月末に東京都小平市立A小学校の全生徒を通じて各世帯に配布し（460票）、11月はじめに回収した。調査用紙は個人情報保護法に配慮して全て封筒に入れて提出してもらい、配布および回収は担任を介して行った。

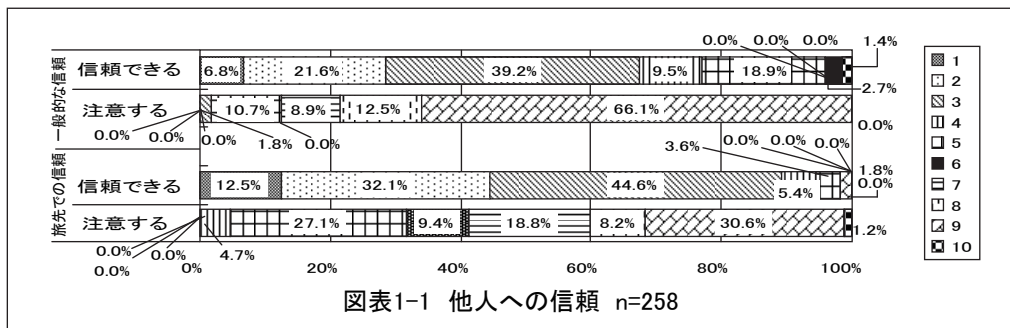
また、同年12月に小平市立B小学校において調査を行なった。なお、回収は当方が行なった。東京都小平市は学区制を採用している。一方、東京都区部では、すでに学校選択制を採用しており、近い将来両制度による差異も考慮したい。

有効回答数及び回収率は、小平A小学校:460票配布、153枚回収（33.3%）・小平B小学校:412票配布、110票回収（26.7%）、合計：872票、回収263票（30.2%）であった。

なお、分析にはSPSS統計パッケージを使用し、単純集計・クロス集計を行い χ^2 検定を行なった。

結果と考察

第1章 人間への信頼度 —— 一般的な信頼度と旅先や知らぬ土地での信頼度 ——



一般的に人を信頼できると思うか、それともできないと思うか。また、旅先や見知らぬ土地で人を信頼できると思うか（図表中では「旅先での信頼」と表記）、それともできないと思うかを以下の様に分類する。

「1」をほとんどの人は信頼できる、「9」を注意することに越したことはないとし、その中間を「5」としたとき「1」から「9」の9段階に分けて、「一般的」に人を信頼するか注意するか、「旅先や見知らぬ土地」では信頼するか注意するか、それぞれの状況における信頼度を表している（なお「10」はわからないと答えた者である）。

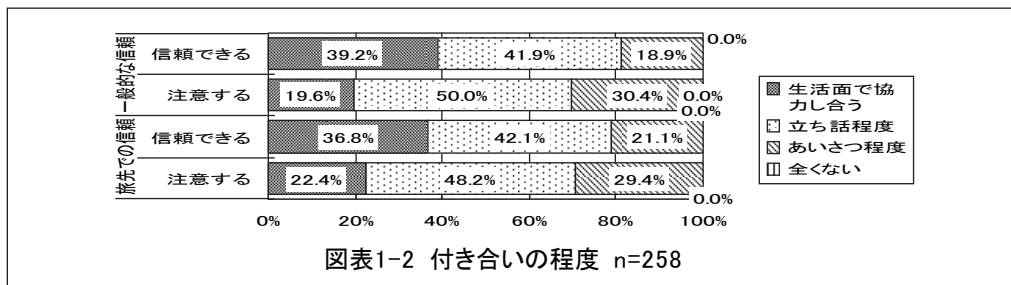
信頼すると答えた人は、「一般的」に或は「旅先や見知らぬ土地」いずれであっても、それぞれ96%, 98.2%の人が「1」から「5」の中間までの信頼度を示している。最も多かったのは両者ともに「3」の値の信頼度であったが、「一般的」では6.8%、「旅先や見知らぬ

土地」では12.5%の人が“ほとんどの人は信頼できる”という、強い信頼度を持っている。

注意すると答えた者の中で「一般的」では87.5%、「旅先や見知らぬ土地」では67%が「5」から「9」までの信頼度に当てはまっている。さらに、「一般的」に注意すると答えた人のうち、66.1%が“注意することに越したことはない”と、「旅先や見知らぬ土地」に比較してもより強い警戒心を持っていることがわかる。

「一般的」な信頼度と「旅先や見知らぬ土地」での信頼度の比較では、「一般的」なほうが警戒心がより強く現れている（図表1-1）。両者ともに信頼できる群・注意する群に有意な差がみられた（ $p<0.001$ ）。

(1) 近所の人との日常的な付き合いの程度



近所の人との日常的な付き合いの程度を見てみると、「信頼できる」「注意するにこしたことはない」の両群いずれにおいても付き合いが全くないと回答した者はいない。しかし、付き合いの程度では「立ち話程度」「あいさつ程度」の占める割合が「一般的」にでは、信頼出来るでは60.8%，注意するでは80.4%，「旅先や見知らぬ土地」での信頼出来るでは63.2%，注意するでは77.6%と、あまり深い付き合いのないことがわかる。特に「一般的」、「旅先や見知らぬ土地」の双方において「注意する」と回答した人においては、「生活面で協力し合う」という付き合いが19.6%，22.4%と、両者共に低いことがわかる。

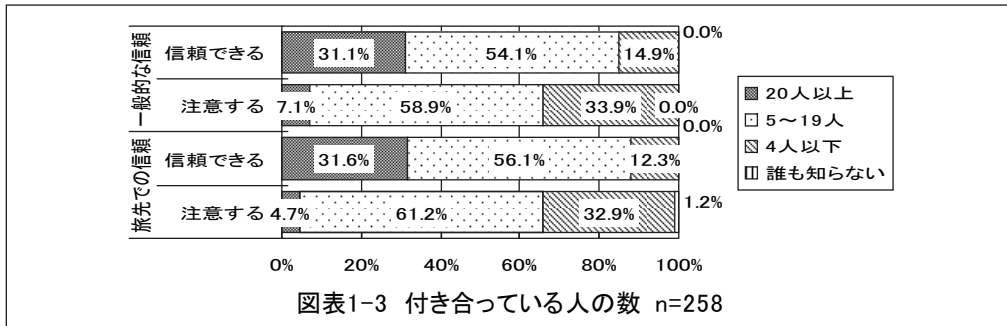
近所での付き合いの程度においては、「一般的」に或は、「旅先や見知らぬ土地」の差異によってもたらされる違いよりも、「人を信頼出来る」かと「注意する」かとの差異による付き合いの程度の方が大きな違いが見られる（図表1-2）。両者ともに信頼できる群・注意する群に有意な差がみられた（ $p<0.001$ ）。

(2) 近所で付き合っている人の数

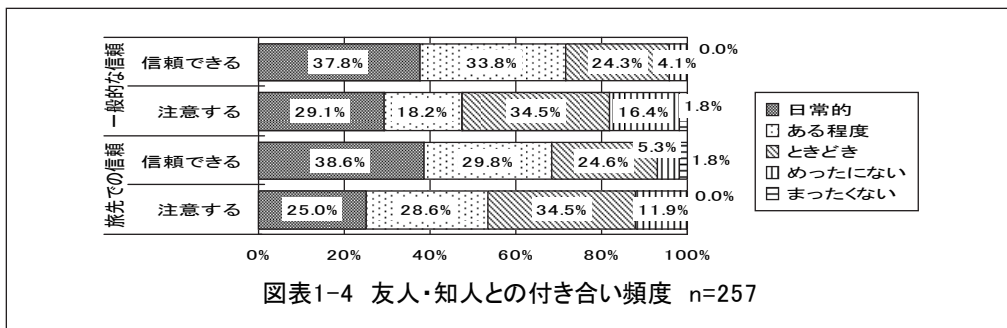
近所で付き合っている人数は5～19人と答えた者がいずれも多かった。「一般的」にでは信頼出来るは31.1%、「旅先や見知らぬ土地」では信頼出来るは31.6%の者が、20人以上の人と付き合いがあると答えている一方で、「一般的」で注意すると答えた者は33.9%、「旅先や見知らぬ土地」で注意する者は32.9%で、近所で付き合う人の数は4人以下という答えになっている。

近所との付き合いの程度と同様に、人を「信頼出来る」場合と「注意する」場合の比較

により付き合う人数に大きな差が見られ、「一般的」・「旅先や見知らぬ土地」それぞれの状況において、共に類似傾向があることが読み取れる（図表1-3）。両者ともに信頼できる群・注意する群に有意な差がみられた（ $p<0.001$ ）。



(3) 友人・知人との付き合いの頻度

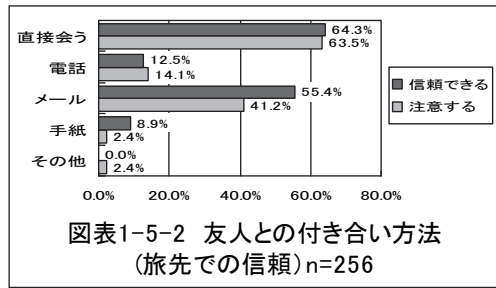
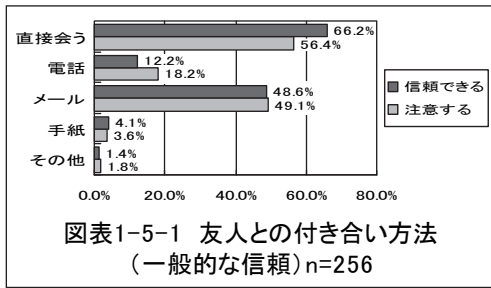


友人・知人との付き合いにおいても、「一般的」・「旅先や見知らぬ土地」両者において、付き合いの頻度は類似傾向が見られる。「一般的」で信頼できる者71.6%、「旅先や見知らぬ土地」で信頼出来る者の68.4%が「日常的」あるいは、「ある程度」友人・知人との付き合いがあると答えている。

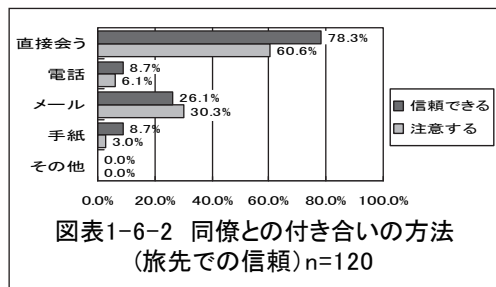
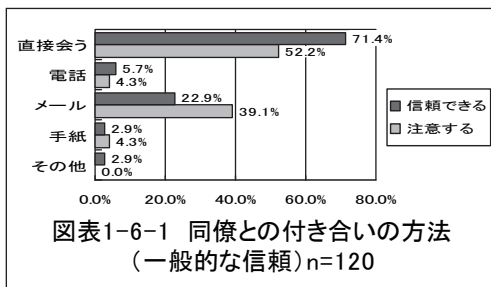
「一般的」・「旅先や見知らぬ土地」それぞれにおいて注意すると答えた者は、「ときどき付き合う」の答えが34.5%と同数で最も多い（図表1-4）。両者ともに信頼できる群・注意する群に有意な差がみられた（ $p<0.001$ ）。

(4) 友人との付き合いの方法

友達との付き合いの方法については、「直接会う」について、「メールの活用」が多く見られる。「電話」によるコミュニケーションよりも、時間帯や相手のおかれた状況を考える必要性が低いメールを用いるという、時代背景をうかがわせる結果となった。会話によるコミュニケーションといった付き合いの手段が減少し、手軽さが主流となる一方で、コミュニケーション能力の低下が懸念される（図表1-5-1，図表1-5-2）。

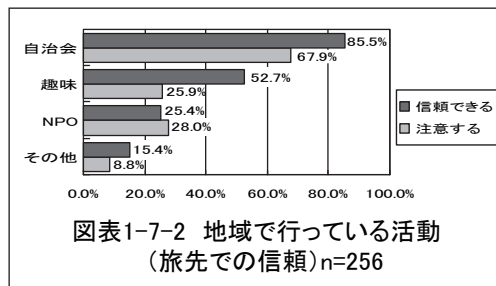
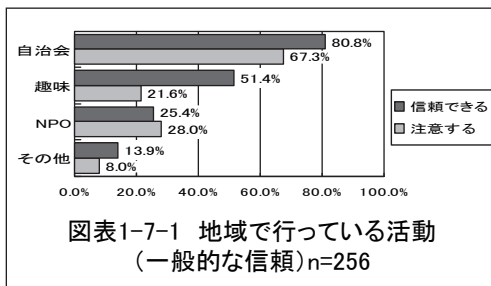


(5) 同僚との付き合いの方法



一方、同僚との付き合いの方法は、電話やメールでの付き合いよりも、「一般的」・「旅先や見知らぬ土地」共に信頼出来ると思う者は、「直接会う」という割合が多い(図表1-6-1、図表1-6-2)。

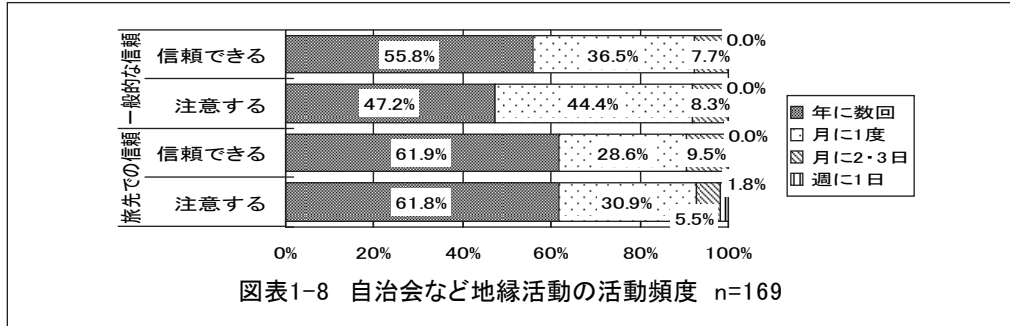
(6) 地域で行っている活動



地域で行っている活動に関しては、「自治会活動」への参加が他の項目より最も多い。しかし「一般的」、或いは「旅先や見知らぬ土地」で人を信頼出来ると思った者の特徴は、双方の「注意する」者に比べ、自治会活動への参加の割合が高いこと、同時に「趣味」への取組みが多く見られる。

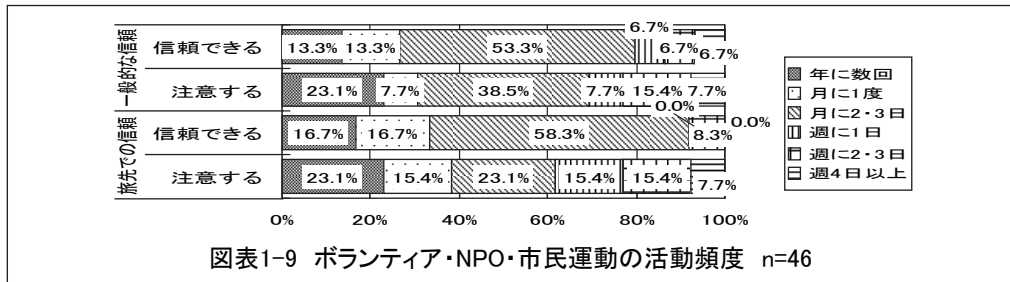
「一般的」・「旅先や見知らぬ土地」において注意するという者の特徴としては、「NPO・ボランティア・市民活動」などへの参加が顕著であることがあげられる(図表1-7-1、図表1-7-2)。

(7) 自治会など地縁活動の頻度



自治会などの地縁活動では、いずれも年に数回あるいは月に一度活動する者が大半を占めている。「一般的」では信頼できる、注意すると答えた者は、「年に数回」と並んで「月に1度」の参加が顕著で、「旅先や見知らぬ土地」の信頼できる又は、注意すると回答した者に比べ、地縁活動への参加頻度が高い（図表1-8）。両者ともに信頼できる群・注意する群に有意な差がみられた ($p<0.001$)。

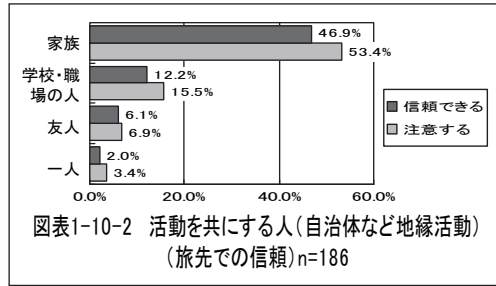
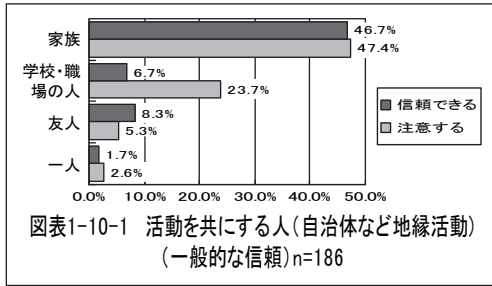
(8) ボランティア・NPO・市民運動の活動頻度



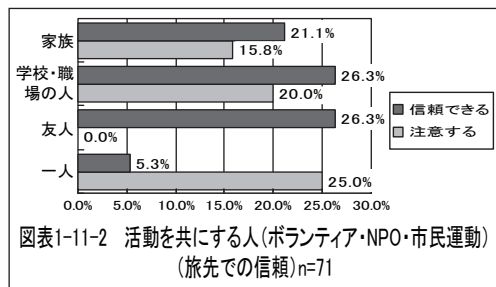
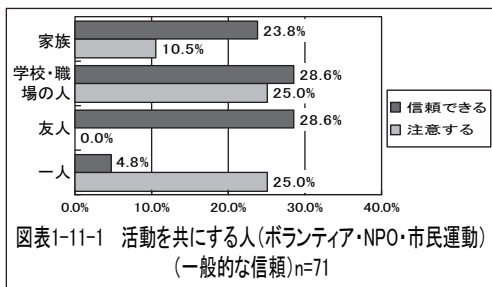
ボランティア・NPO・市民運動の活動頻度は、いずれも月に2・3回という回答が多い。「一般的」および「見知らぬ土地」の双方で「注意する」と回答した者は、活動頻度が二分されている。週に1日から4日以上活動頻度も他と比較して多く、活動への積極的な傾向が伺える（図表1-9）。両者ともに信頼できる群・注意する群に有意な差がみられた ($p<0.001$)。

(9) 自治会など地縁的活動を共にする人

自治会など地縁的活動については、家族との参加が多い。次いで、学校や職場の人と参加するという回答が続く。これは、学校や職場が地域との交流事業を行っていることが反映されているのであろうか（図表1-10-1, 図表1-10-2）。信頼できる群・注意する群に有意な差がみられた ($p<0.001$)。

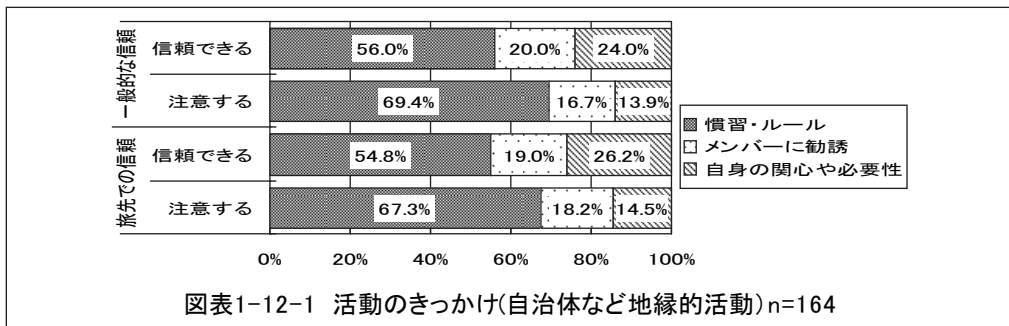


(10) ボランティア・NPO・市民運動を共にする人



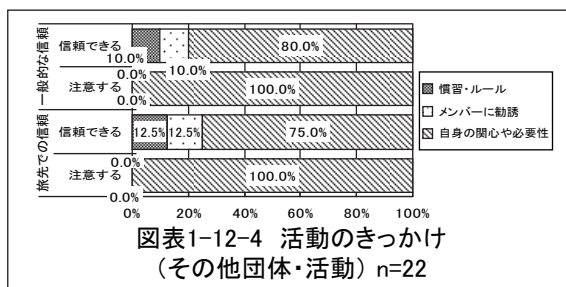
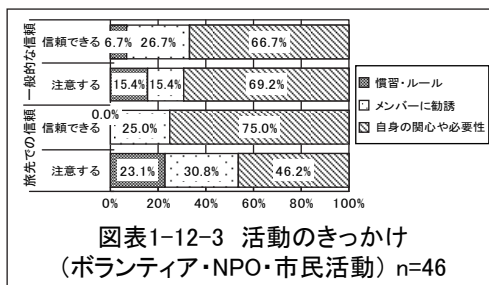
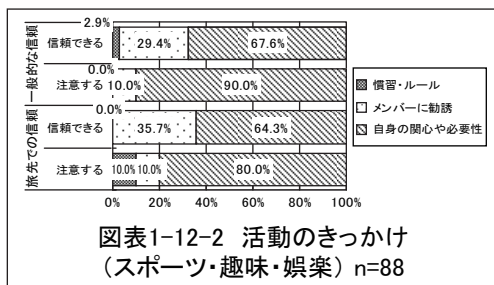
「一般的」・「旅先や見知らぬ土地」いずれにおいても「信頼できる」と答えた人と、「注意する」と答えた人の傾向が分かれた。両者共に「信頼できる」と答えた人は、「家族」や「学校・職場の人」に次いで、「友人」との参加がほぼ同率で多いのに対し、「注意する」と答えた者は、両者共に「家族」・「学校・職場の人」に次いで、「1人」で参加するという興味深い結果となった(図表1-11-1, 図表1-11-2)。両者ともに信頼できる群・注意する群に有意な差がみられた ($p < 0.001$)。

(11) 活動のきっかけ

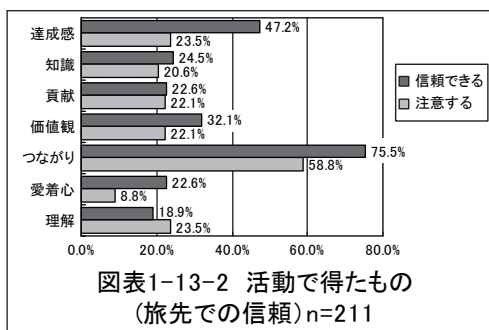
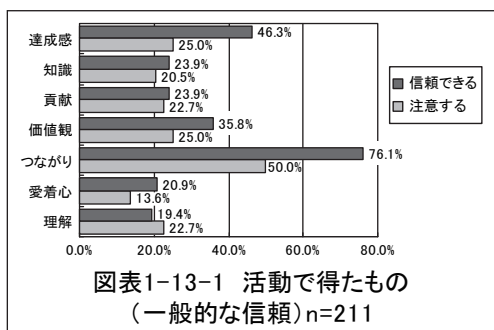


活動を始めたきっかけは、その活動内容によって大きく異なる。自治会などの活動においては「慣習やルール」といった、自主性に欠ける結果であった。一方、「スポーツや趣味・娯楽」、「ボランティア・NPO・市民活動」「その他団体活動」においては、「自分自身の関

心や必要性」がきっかけとなっており、自主的積極的に参加している。特に、「スポーツや趣味・娯楽」、「その他団体・活動」において注意する群の「自身の関心や必要性」の割合が多くなっている（図表1-12-1、図表1-12-2、図表1-12-3、図表1-12-4）。

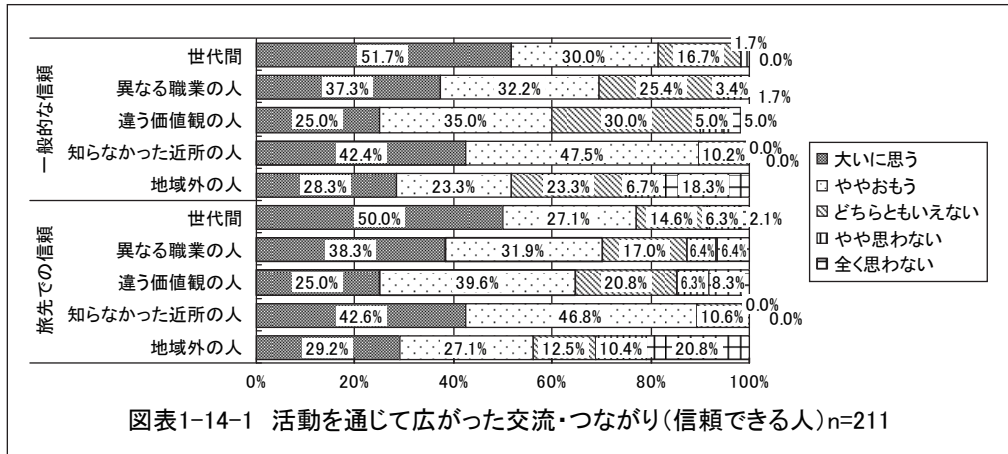


(12) 活動を通じて得たもの

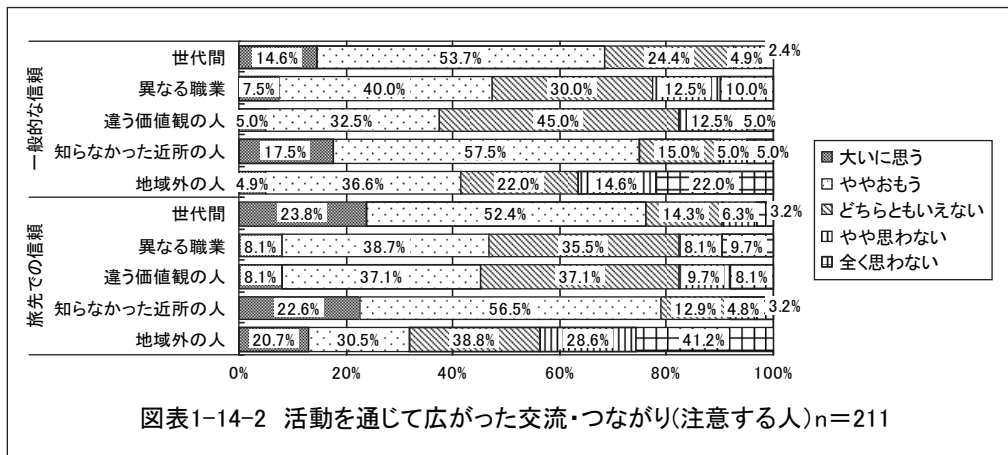


「一般的」・「旅先や見知らぬ土地」で、「信頼できる」「注意する」のいずれの群においても、活動を通じて得たものとして最も多い回答は、共通して、人と人との「つながり」であった。第2番目には「達成感」が、いずれのカテゴリーにおいても多くなっている（図表1-13-1、図表1-13-2）。信頼できる群・注意する群に有意な差がみられた ($p < 0.001$)。

(13) 活動を通じて広がった交流・つながり



信頼できると回答した者のうち、「一般的な信頼」「旅先や見知らぬ土地」の双方で、活動を通じて広がった交流やつながりの中で、一番割合が高いのは「世代間」の交流で、2番目が「知らなかった近所の人」、3番目が「異なる職業の人」、4番、5番が「地域外の人」、「違う価値観の人」という結果になった(図表1-14-1)。



一方、「一般的」「旅先や見知らぬ土地」の双方において注意するにこしたことはないとは回答した者のうち、活動を通じて広がった交流やつながりの中で比較的割合が高いのは「知らなかった近所の人」、「世代間」の交流があげられるが、「信頼できる」者に比べると低くなっている(図表1-14-2)。信頼できる群・注意する群に有意な差がみられた(p<0.001)。

文責：草野篤子

第2章 他人への信頼度と生活環境

この章では、「一般的な信頼」と「旅先での信頼」の信頼の度合いによって、保護者の日常生活、学校、子どもの生活、社会への関心、属性に違いがあるかどうかをクロス集計の結果を分析しながら見ていく。信頼度の高い「信頼できるグループ」と、他人に対して、注意するに越したことはないと感じている「注意グループ」に分けて特徴を浮き彫りにし、他人への信頼が強い背景を探り、人間への信頼を高めるソーシャル・キャピタルについて考察する。

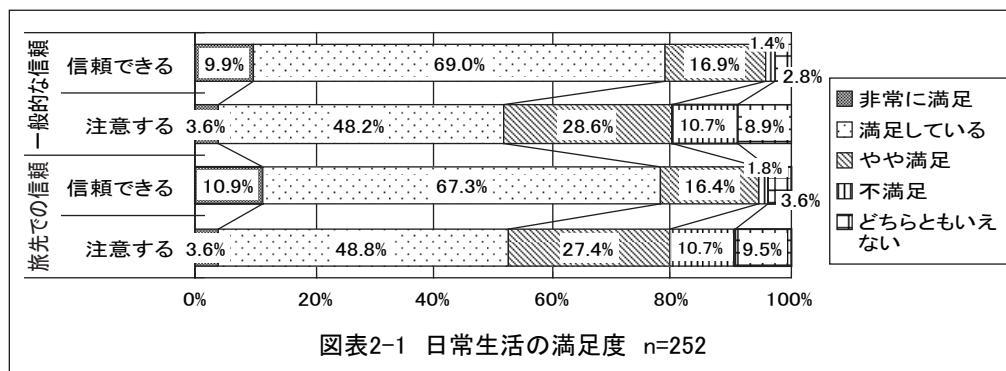
1. 他人への信頼度と日常生活の関係について

(1) 他人への信頼度と日常生活の満足度との関係

他人への信頼度と生活の満足感には有意な相関が見られた。信頼できるグループについてみると、一般的な信頼では、「日常生活に非常に満足」「満足している」と回答した人は78.9%、旅先での信頼が78.2%で共に約8割の人が生活に満足している様子が伺えた。

それに対して、注意するグループでは、「日常生活に非常に満足」「満足している」と回答した人は、一般的な信頼は51.8%、旅先での信頼は52.4%と信頼できるグループよりも低い結果だった（図表2-1）。

この結果は、生活に満足感がある人の方が、他人への信頼度が高いことを示唆している。

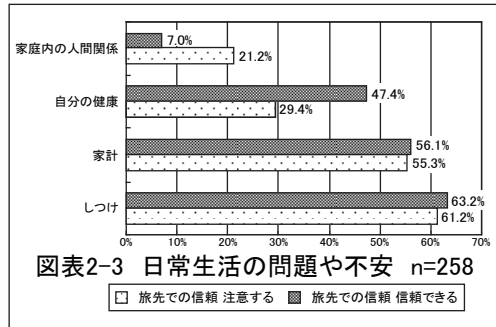
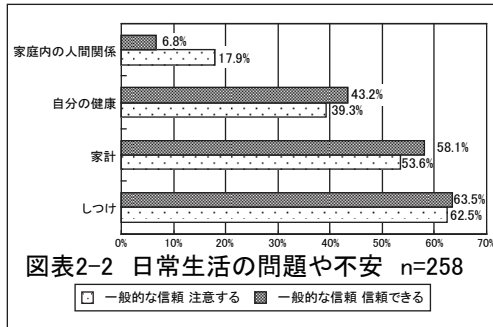


(2) 他人への信頼度と日常生活での問題や不安との関係

日常生活の問題や不安についてたずねた。選択肢は、自分の健康、家族の健康、乳幼児期の子育て、しつけ、家計、家庭内での人間関係、近所づきあい、住環境、非行や犯罪の増加についてである。一般的な信頼では有意な相関関係は見られなかったが、旅先での信頼については、「自分の健康」と「家庭内での人間関係」に相関があった。

信頼できるグループを見てみると、一般的な信頼、旅先での信頼では、「しつけ（63.5%・63.2%）」、「家計（58.1%・56.1%）」「自分の健康（43.2%・47.4%）」が不安や心配が高い傾向にある。同様に、注意するグループも「しつけ」「家計」では50%以上の人不安を

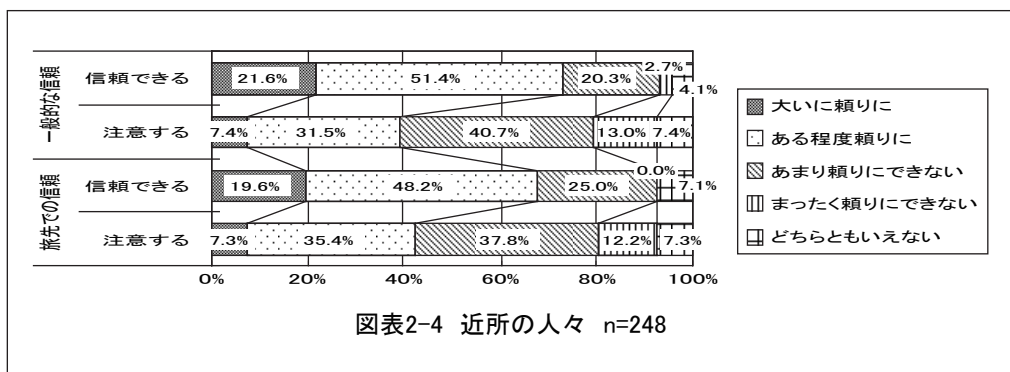
抱えていた。また、非行については、注意するグループの方が各々10ポイント以上、不安な人が多い傾向が見られた（図表2-2、図表2-3）。



(3) 他人への信頼度と日常生活の問題や心配事を相談する人や組織との関係

日常生活で心配や不安があるときに相談する組織についてたずねた。設問は、市役所、教育機関、病院、警察、自治会、NPO、勤務先、近所の人々、家族、親戚、友人・知人、職場の同僚の14項目である。それぞれの設問では、「大いに頼りになる」「ある程度頼りになる」「あまり頼りにできない」「まったく頼りにできない」「どちらともいえない」の5段階で回答してもらった。

一般的な信頼で有意な相関が見られた項目は、「近所の人々」「知人・友人」、旅先での信頼については、「自治会」「NPO」「近所の人々」と両者には違いが見られた。両方の結果に有意な相関が見られた「近所の人々」は、信頼できるグループについてみると「大いに頼りになる」と回答した人は、一般的な信頼が21.6%、旅先での信頼が19.6%、それに対して注意するグループでは、「大いに頼りになる」と回答した人は、一般的な信頼が7.4%、旅先での信頼が7.3%と少ない割合だった（図表2-4）。



信頼できるグループでは、「大いに頼りにしている」組織や人は、「家族」がもっとも多く、一般的な信頼71.6%、旅先での信頼66.7%、次いで「友人・知人（43.2%・42.1%）」「親戚（29.7%・26.3%）」だった。血縁関係に相談を求めていることが確認される。

「教育機関」について注目すると「あまり頼れない」「まったく頼れない」と回答した人は、信頼できるグループでは、一般的な信頼が16.3%、旅先での信頼が15.8%、注意するグループでは、一般的な信頼が40.7%、旅先での信頼が43.4%というように、注意するグループの方が学校などの教育機関に相談する割合は少ない（図表2-5）。

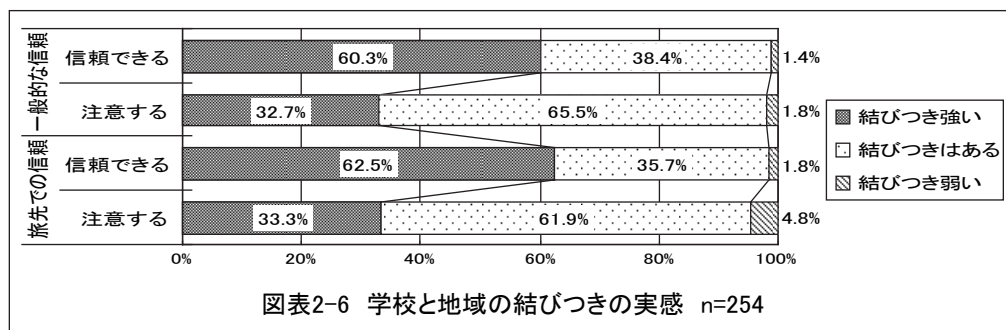
	頼りになる		頼れない	
	一般的な信頼 (信頼・注意)	旅先での信頼 (信頼・注意)	一般的な信頼 (信頼・注意)	旅先での信頼 (信頼・注意)
市役所	40.6%・36.3%	45.7%・25.9%	51.3%・54.5%	47.4%・64.2%
教育機関	74.3%・56.3%	73.7%・51.8%	16.3%・38.2%	15.8%・43.4%
自治会	35.2%・20.0%	36.8%・20.7%	54.1%・61.8%	50.9%・54.9%
NPO	33.8%・14.8%	36.8%・12.3%	46.0%・57.4%	43.9%・58.1%
家族	95.9%・85.4%	94.8%・89.2%	1.4%・14.5%	1.8%・9.6%
親戚	72.9%・60.7%	66.7%・60.7%	18.9%・39.3%	24.5%・36.9%
友人・知人	89.1%・72.2%	86.0%・73.2%	5.4%・26.0%	8.8%・23.1%

図表2-5 日常生活の問題や不安を相談する組織や人 n=248

2. 他人への信頼度と学校との関係について

(1) 他人への信頼度と学校と地域の結びつきの関係について

政府の調査項目にない設問である。研究年報No.13の分析にあるように小平市は、保護者と学校のつながりが強い地域である。一般的な信頼、旅先での信頼共に有意な相関が見られた。「地域との結びつきが強い」と考えている人は、信頼できるグループと注意するグループでは、信頼できるグループの方が高い割合で分布している。一般的な信頼では60.3%と32.7%、旅先での信頼が62.5%と33.3%というように差が大きい（図表2-6）。

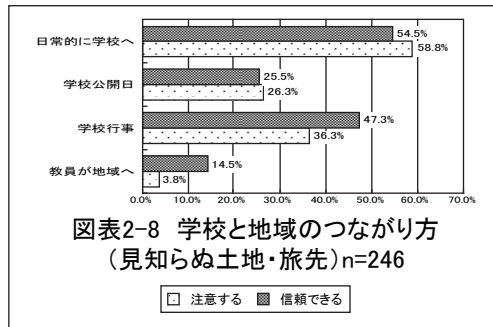
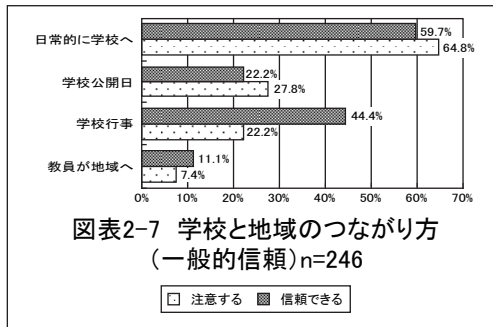


(2) 他人への信頼度と学校への参加の関係について

今回の調査は、小学校の学区自由化と地域の間接的な関係をも浮き彫りにする狙いを持っている。この設問も地域と学校の結びつきについて明らかにするために、関わり方についてたずね

た。「地域の人が学校へ行く」「学校公開日に出かけていく」「学校行事に参加する」「教員が地域の行事に参加する」「その他」について、各々についての参加を聞いた。相関について有意差は見られなかったが、カイ2乗検定では、すべての選択肢で有意（ $P < 0.001$ ）だった。

「学校行事に参加する」に注目すると、信頼できるグループと注意するグループには、違いが見られた。一般的な信頼では44.4%と22.2%，旅先での信頼が47.3%と36.3%だった。また、「教員が地域の行事に参加する」に違いが見られた。一般的な信頼では11.1%と7.4%，旅先での信頼が14.5%と3.8%，というように他人への信頼度で見方が異なっている（図表2-7、図表2-8）。

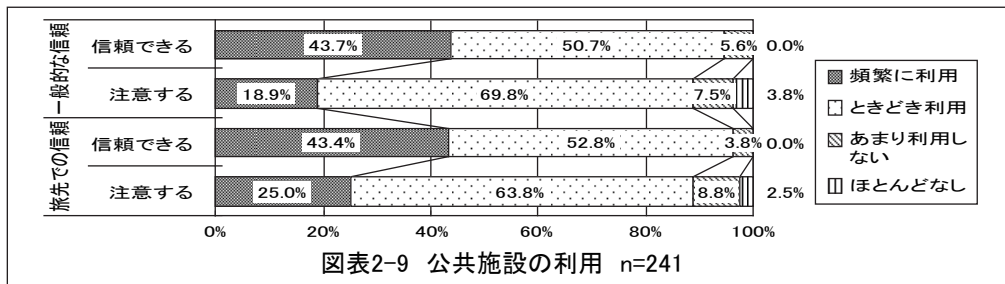


3. 他人への信頼度と子どもの生活の関係について

(1) 他人への信頼度と回答者の公共施設の利用について

地域にある公共施設（学校、公民館、図書館、地域センターなど）の利用について4段階でたずねた。一般的な信頼、旅先での信頼の両方に有意な相関が認められた。「頻繁に利用する」と回答した人は、信頼できるグループの方が割合は高い。両者を比較してみると、一般的な信頼では43.7%と18.9%，旅先での信頼が43.4%と25.0%で、信頼度の違いと公共施設の利用頻度に関係があることが分かった。

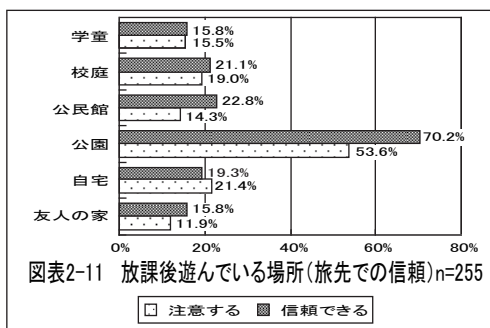
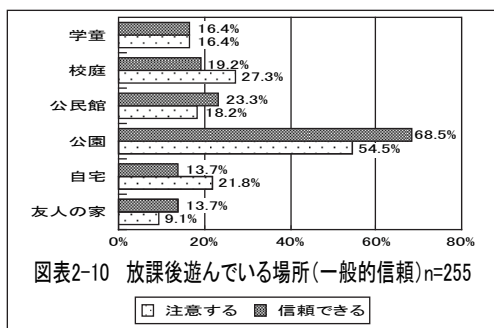
埼玉県さいたま市の『ソーシャル・キャピタル向上に向けた基礎報告 2007年3月』の調査結果は、信頼と「図書館の利用延べ人数」に関係が深いことを明らかにし、クロス集計から公共施設の利用頻度が高いことと信頼はソーシャル・キャピタル向上に関係が深い要素であることを提言している（図表2-9）。



(2) 他人への信頼度と放課後の過ごし方との関係について

放課後の小学生の過ごし方についてたずねた。学童クラブ、学校の校庭、公民館・地域センター、公園、友達の家（参考値）、自宅（参考値）、その他について複数回答で答えてもらった。カイ2乗検定ではすべての選択肢で $P < 0.001$ で有意差が見られた。

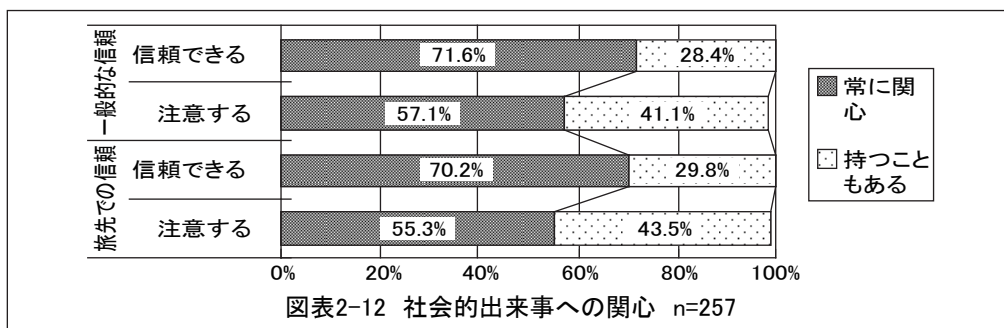
信頼できるグループと注意するグループで、異なる分布が見られた項目は、校庭、公民館・地域センター、公園である。「校庭」は、一般的な信頼が19.2%と27.3%、旅先での信頼が21.1%と19.0%、「公民館・地域センター」は、一般的な信頼が23.3%と18.2%、旅先での信頼が22.8%と14.3%、「公園」は、一般的な信頼が68.5%と54.5%、旅先での信頼が70.2%と53.6%、というように注意するグループの方が、子どもの遊び場の危険度に関心があることを推測させる結果となった。参考値ではあるが、「自宅」で過ごす人と回答した人を見ると、注意するグループの方が、一般的な信頼、旅先での信頼の両方とも割合が高くなっていることから、他人への信頼度が低い人ほど、子どもを外で遊ばせることに不安を抱いていると言えよう（図表2-10、図表2-11）。



4. 他人への信頼度と社会への関心の関係について

(1) 他人への信頼度と社会の出来事への関心について

社会で起こっている出来事への関心について、4段階でたずねた。「あまり関心を持っていない」人はひとり、「まったく関心がない」と回答した人は0人だった。ほとんどの人が何らかの関心を持っていた。カイ2乗検定では、 $P < 0.001$ で有意差が見られた。



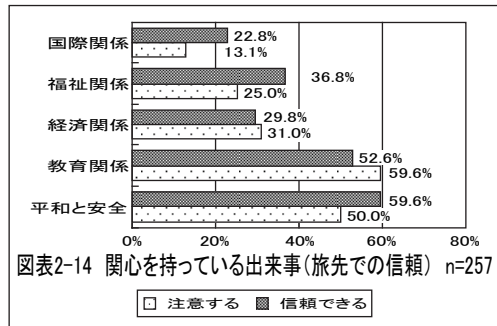
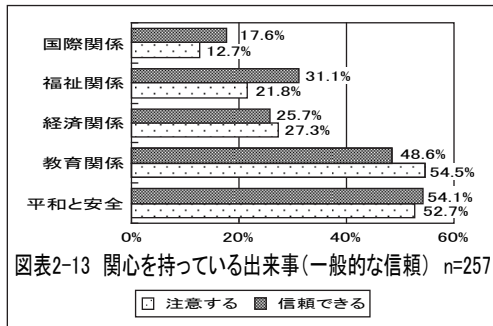
信頼できるグループでは、一般的な信頼が71.6%、旅先での信頼が70.2%で、両者共に7割の回答者が「常に關心を持っている」と答えている。

一方、注意するグループでは、一般的な信頼が57.1%、旅先での信頼が55.3%、というように各々約14ポイント回答者が少なくなっている。他人への信頼が強い人の方が、社会への關心が高いことが推測される（図表2-12）。

(2) 他人への信頼度と關心が強い出来事について

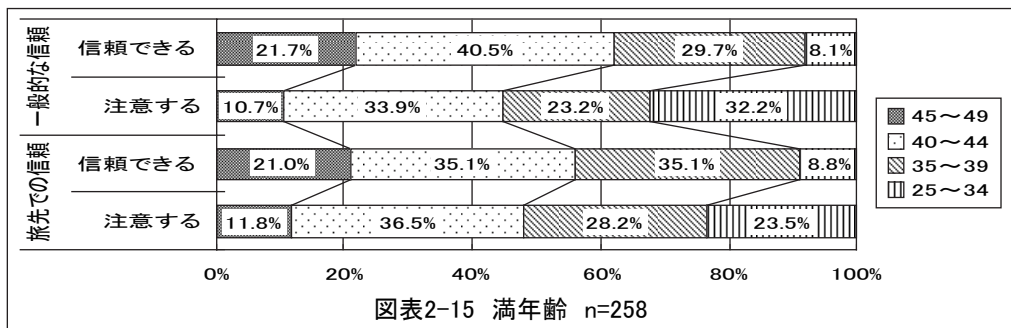
社会の出来事の内容についても尋ねた。国際関係、経済関係、福祉関係、教育関係、平和と安全、その他について、複数回答で選択してもらった。カイ2乗検定では、すべての選択肢で $P < 0.001$ の有意差が見られた。

信頼できるグループと注意するグループに違いが見られたのは、国際関係と福祉関係だった。信頼できるグループの方が割合は高い。「国際関係」についてみると、一般的な信頼が17.6%と12.7%、旅先での信頼が22.8%と13.1%という分布である。「福祉関係」は、一般的な信頼が31.1%と21.8%、旅先での信頼が36.8%と25.0%、という違いが見られた。他人への信頼度の高い人は、「国際関係」や「福祉関係」への關心が強いことが認められた（図表2-13、図表2-14）。



5. 他人への信頼度と属性との関係について

(1) 他人への信頼度と満年齢

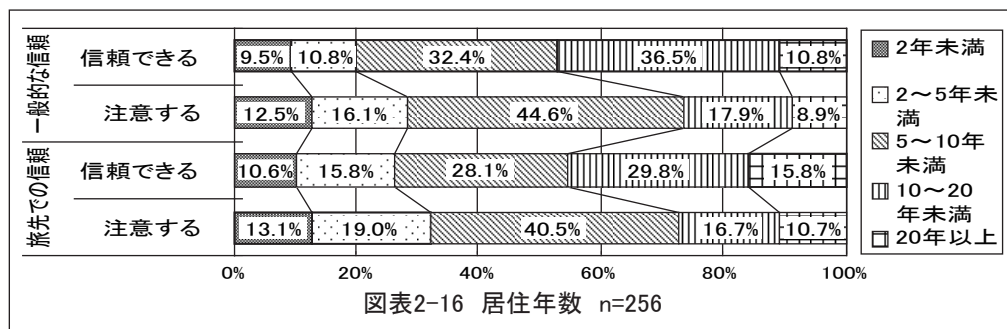


満年齢は、有意な相関が見られた。信頼できるグループは、若い人よりも人生経験がある45歳以上の人の方が多く、一般的な信頼が21.7%、旅先での信頼が21.0%だった。それに対して注意するグループの25歳から34歳までの若い人に注目すると、一般的な信頼が32.2%（45歳以上8.9%）、旅先での信頼が23.5%（45歳以上11.8%）、というように、若い人のほうが他人への信頼は弱い特徴が確認された（図表2-15）。

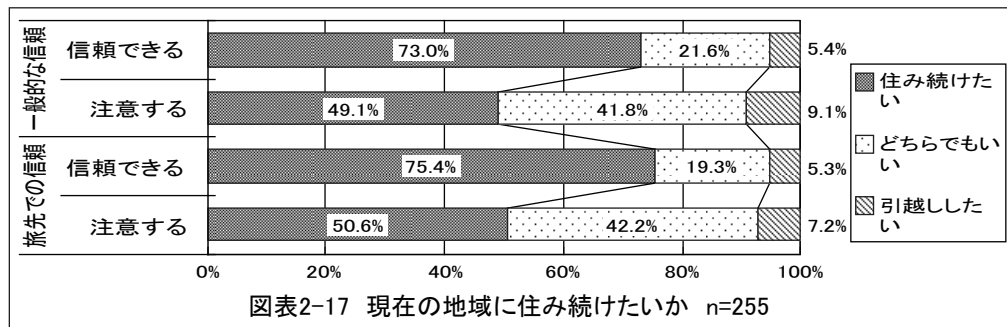
(2) 他人への信頼度と居住年数、現在の住まいに住み続けたいか

居住年数や住み続けたい地域か、ということは、内閣府の調査や自治体の調査研究でも、ソーシャル・キャピタルの向上には深く関わる要素となっている。今回の小平市を対象にした調査でも、有意な相関が見られた。

「居住年数」について「10年～20年」「20年以上」を合わせて注目すると、信頼できるグループと注意するグループに違う特徴が見られる。一般的な信頼は47.3%と26.8%、旅先での信頼は45.6%と27.4%、というように居住年数が長いほど、他人への信頼度は高い傾向が示唆された（図表2-16）。



また、「現在の住まいに住み続けたいか」という設問で「住み続けたい」と回答した人は、信頼できるグループの人の方が注意するグループに比べて高い割合だった。一般的な信頼は73.0%と49.1%、旅先での信頼は75.4%と50.6%というように、他人への信頼が高い人は、今の住まいに住み続けていたいと考えていた（図表2-17）。



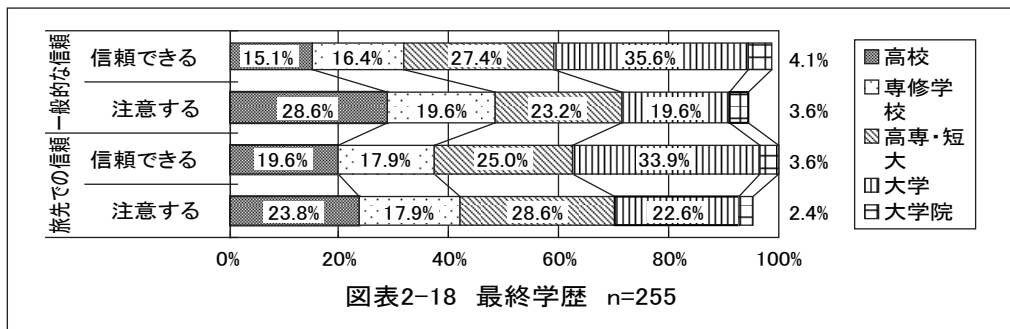
(3) 他人への信頼度と既婚・未婚

「一般的な信頼」に有意な相関が認められた。既婚（現在配偶者がいる）、既婚（配偶者と死別もしくは離別）、未婚の3つの選択肢を用意した。今回の調査では、92.2%の人が「配偶者あり」と答えているが、クロス集計をした結果、一般的な信頼は100.0%、旅先での信頼は98.2%、というように配偶者がいる人の方が、他人への信頼度が高いことが明らかになった。

(4) 他人への信頼度と最終学歴

「一般的な信頼」に有意な相関が認められた。小中学校卒、高校卒、専修学校卒、高専・短大卒、大学卒、大学院卒、その他から選択してもらった。信頼できるグループと注意するグループには、特徴が見られた。「高校卒まで」について見てみると、一般的な信頼は16.5%と32.2%、旅先での信頼は19.6%と27.4%、というように高卒の人は、他人に注意する人の割合が多い傾向にあった（図表2-18）。

一方、「大学卒以上」について見てみると、一般的な信頼は39.7%と23.2%、旅先での信頼は43.5%と26.2%で、大学卒以上の人は、人を信頼する傾向が強いことが伺える。



【まとめ】

内閣府では、2002年、2004年日本総合研究所に委託し、ソーシャル・キャピタルの調査を実施した。その後、2007年に日本総合研究所が継続調査を実施し、2008年3月に報告書を作成している。調査に当たっては、「信頼」「つきあい」「社会参加」をソーシャル・キャピタルの計測として行っている。本稿では、さらに「信頼」に焦点を当てて、『一般的な信頼』と『旅先・見知らぬ土地での信頼』での特徴について分析した。そして、信頼度の高い人と、人に注意する人との間の傾向の違いについて浮き彫りにした。

政府の分析では、「信頼できる」と回答した人をソーシャル・キャピタル指数が高いと考えているが、本研究から「信頼できる」グループは、つきあいの程度、つきあっている人の数が豊かであることが確認できた。また地域での活動については、地縁的な活動としての自治会、スポーツ・趣味・娯楽活動に差が認められた。ゆるやかな人とのつながりと

考えられるNPOは、差が認められなかった。

自治会の活動のきっかけとしては、「注意する」グループは、「慣習ルール」として参加する人が多く、「自身の関心や必要性」と回答する人は少ない。また、今後の活動意向で、「一般的な信頼」と「旅先での信頼」で特徴が見られた。旅先・見知らぬ土地でも信頼する人の方が、趣味やNPOの活動を現状維持しようとする人が多い。

「信頼できる」グループは、日常生活に満足している割合が高く、心配事を相談する相手として近所の人々を頼りにしていて、人とのつながりが豊かであることが確認できる。また、ブリッジ型につながりと言われているNPO、地域とつながっている公共施設の利用や社会への関心の高さ、居住年数が長いこと、住み続けたい町であること、高学歴が、「注意する」グループに比べて高いことが、今回の調査から明らかになった。

小平市は、コミュニティスクールの特区である。今回の調査は、その指定校も含まれている。地域の人や保護者の学校への参加も少なくないと考えられる。しかし、「信頼できる」グループと「注意する」グループでは、学校と地域の結びつき方の実感や結びつきの強さに違いが見られ、とくに「学校行事」への思いの差は大きかった。

小平市の調査結果から、地域と小学校を中心にしたゆるやかな結びつきが、人と人とのつながりをきづき、他人への信頼を高めることに発展していると推測される。今後、今年実施した品川区と小平市の調査結果を検討して、地域の傾向を明らかにし、小学校を中心にしたソーシャル・キャピタルを、子どもの最善の利益を保障しながら、育てていく手立てについて考察していきたいと考えている。

文責：瀧口眞央

【参考論文・資料】

- ・内閣府国民生活局『平成14年度 ソーシャル・キャピタル～豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて～』2003年
- ・内閣府経済社会総合研究所『コミュニティ機能再生とソーシャル・キャピタルに関する研究調査報告書』2006年
- ・ソーシャル・キャピタル政策展開研究会『わが国のソーシャル・キャピタル政策展開に向けて 報告書（案）』2008年2月
- ・さいたま市政策局政策企画部コミュニティ課市民活動支援室
『ソーシャル・キャピタル向上に向けた基礎調査 報告書』2007年3月
- ・西出優子『ソーシャル・キャピタル形成政策の国際比較』2005年10月 日本財政学会
- ・白梅学園大学 短期大学 教育・福祉研究センター『研究年報 No.13』2008年

くさの あつこ（社会福祉学・生活経営学）
たきぐち まお（子ども学）